

# 「3.11」から1年

何げない平和な暮らしの尊さを作品にしてきた映画作家の大林宣彦監督が、東日本大震災一年を機に、南相馬市などを訪ねた。東京電力福島第一原発事故で掛け替えのない日常を失いながらひた向きに生きる若者との交流から、大林監督は未来への希望を語った。

## ふくしま 訪れ語る

おおばやし・のぶひこ  
1938年広島県生まれ。作品に「転校生」「時をかける少女」「なごり雪」など。戦災、震災の犠牲者を慰霊する新潟県長岡市の花火を題材にした新作映画「この空の花」が今春公開。

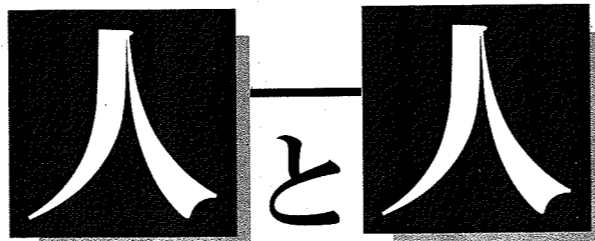
### 映画作家 大林宣彦監督

背景になってしまいます。計画的避難区域に指定された飯館村は、胸に迫りま

窓は白いカーテンが閉じられ、暮らしの気配が消えています。震災前からあったはずの道路脇には「おかせりなさい」という看板が置かれたまま。みんながつながらなければならぬ時に断ち切られて、何とも悔しいよね。

そんな過酷な現実の中で被災地の人々は「自分は我慢するから、もっとつらい人を助けてほしい」と話していました。我慢、思いやり、希望を失わないその姿が世界の人々の心を動かし

## つながり求め



去年の三月十一日を体験した人々は、ひたすら人と人がつながることを本能的に求め始めました。それはたぶん東日本の風土に合ったものだと、この地で確信しました。

### 忘れていた勇気

JR福島駅でトイレに入ろうとして、若者ごぶつかっちゃってね。普段ならもっとするところを「ごめんなさい」「いえ、ごめんなさい」と互いに声を掛け合ってた。もううれしかった。忘れられていたつながりの原風景に出会いましたね。南相馬市が今回の目的地の一つで、警戒区域の検問所に行きました。劇映画を撮る僕のような人間は、被災地に行っただけじゃないと思っていました。非日常を描くことで日常の当たり前の素晴らしさを伝えようという劇映画にとって、自然災害や原発事故が日常になった所は手の出しようがない。もし劇映画を撮ったら、あの原発施設でさえ単なる



## 未来を創るのは君たち

### がれきに絵描く 保原高生を激励

伊達市の保原高を訪れた映画作家の大林宣彦監督は「がれきに花を咲かせようプロジェクト」の生徒たち

ここで世界とつながっていい」と大林監督は語り始めた。「思えば人間も不完全なもの。手を伸ばし周りのいろんな不完全なものに寄り添ってあげば温かいつながりができる」

天災と人災で掛け替えのない平穏な日常を壊された生徒たちを思いやり、「頑張ってもしょうがない、と絶望することがあるかもしれない。でも諦めるなよ。すげえぞ、君たちが理想とする新しい社会をつくれる

んだ。俺も手伝うから」としてこう締めくくった。「世界の欠片をつなぎ希望や勇気につなげる君たちなら、きっとすてきな大人になる。未来をすてきにしてくれると信じています」

旅の最後に保原高で「がれきに花を咲かせようプロジェクト」を見学しました。地震で壊れた校舎のがれきに生徒たちが花の絵を描いている。がれきは大人社会ではごみ。でも、災害の記憶であるがれきに花を咲かせている。それは災害の恐ろしさを後世に伝え、人々への感謝を忘れないという志です。とても賢いすてきな未来を目指しています。復興とは何でしょう。たぶん、ここに暮らす子どもたちが故郷に誇りを持ち、未来に生きる希望を抱くことではないでしょうか。今は徹底的にこれからの日本の在り方を考え、やり直す機会だと思えます。

### 希望や勇気つなげて

#### ●保原高での発言詳細

壊れた校舎のがれきに花を描く皆さんのプロジェクト、感動しました。復興とは、がれきがなくなってきたことになることと大人は思っています。でも、それは間違い。がれきを忘

れないことが、本当の復興なんだね。がれきは欠片(かけら)です。不完全な物だけれど、それに絵を描くと、欠けてしまったものの存在に気付く。そして、欠片に花を描くことで、あらためて世界とつながっていく。みんながそこに命の花を咲かせることで、自然や宇宙との結

び付きをつくっている。思えば人間も不完全なものだから、完璧になると考えるより、手を伸ばし周りのいろんな不完全なものに寄り添ってあげば温かい思い、つながりができる。君たちは人間としてどんどん賢くなっている。

世界は欠片をつなぎ、生きていく希望や勇気につなげている君たちなら、きっと素晴らしい大人になれる。未来をもっともっとすてきにしてくれると信じています。